法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-07-01

反補語論 ： 先導動詞の提唱

Wu, Niansheng / 呉, 念聖

(出版者 / Publisher)
法政大学教養部
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
法政大学教養部紀要. 外国語学・外国文学編 / 法政大学教養部紀要. 外国語学・外国文学編
(巻 / Volume)
103
(開始ページ / Start Page)
245
(終了ページ / End Page)
261
(発行年 / Year)
1998-02
(URL)
https://doi.org/10.15002/00004787

Hosei University Repository

反補語論

——先導動詞の提唱——

呉　念聖

現在，中国語の文構造を分析する時に，

我一定要学好中文。／僕は絶対中国語をマスターしたい。
老师走进来了。／先生は歩いて入ってきた。
妈妈听不懂日语。／母は日本語を聞いて理解できない。
弟弟吃得很饱。／弟はいっぱい食べて満腹になった。
昨天她来过两次。／昨日彼女は二回来た。

という文の中で下線のついた文成分を補語と称するのが大方の意見である[1]。

孤立語と呼ばれた中国語の場合では，文における語の相互関係，言い換えればその格づけはまず語順に依拠する。現在，普通は，主題先出（topic first）という構文法により，主題を提示し文首に位置する名詞が文の主語とされ，そしてその主語を基点に，後に出て解題（表述）する役割を果たす動詞が述語とされている。その動詞は文の基幹をなしている。

問題は，主語の後に複数の動詞が出て，しかもその関係が平面的でない場合では，どう分析するかのである。先出した動詞を主要動詞つまり表述部の基点とし，その後の動詞を補語として見るのがその一つの処理法だと思われる。したがって，現在の補語観は，主題先出の法則の延長線上にある産物といえよう。

その補語は普通「complement」と英訳されているが，英語のそのものとはまったく性格が違う。文構造の完全原則（weel-formedness）から見れば，英語の補語は絶対不可欠な文成分であるのに対し，中国語の補語は大抵そうではない。つまり，前者は動詞の補完語というべきであるが，後者は前動詞の意味を補足し新たな展開を見せる補充語ともいえる。それに，補語になる品詞も異

Hosei University Repository

なる。英語は名詞または形容詞がなるが，中国語は基本的に動詞または形容詞(同じ形容詞と呼んでも，英中のそのものは違う。前者は単独で述語になれないという点で名詞に近く，後者は述語になれるという点で動詞の一種ともいえる)。

ところで，複数の動詞が存在する場合，前動詞を主要動詞とし後動詞を補語とする分析法を用いないケースも決して少なくない。

例えば，

姐姐在家看书。／姉は家で本を読む。
小李对我说。／李君は私に言う。
他们朝前走去。／彼らは前へ歩いていく。

の文中の「在」「対」「朝」を，動詞としての機能の虚化または意味の希薄化という理由で，あらためて「介詞」(即「前置詞」)と称するのはもう現代中国語文法界の慣れとなっている。角度を換えれば，ここでは後動詞こそ主要動詞と見なされるのである。

また，

她去看电影了。／彼女は映画を見に行った。
老王坐飞机来上海。／王さんは飛行機で上海に来る。

のような文を，今は，前後両動詞の表す意味及びその意味関係から，表現の重点が後動詞におかれている連動文と呼んでいる。

或いは

爸爸想去中国。／お父さんは中国に行きたい。

のような文型についても，必ずしも前からの語順観でとらえていない。「想」を助動詞と称するからには，もう本動詞は「去」であることを認めるようなものなのだ[2]。

実は，文意を考えたら，いわゆる補語は大抵，文表現の重点になる。

そこで，わたしは，後動詞が文表現の重点であるという一般的な傾向を文法

Hosei University Repository

構造から説明することができればと追求してきた。

いかなる文も確かに前から順々に表述されていくが，しかし文の始め（主題を提示した名詞）ではなく，文の終わり（最終最新の動きを表述する最終動詞）を文の立脚点だと考えてもよいではないか。いわば，起点でなく終点を基点とする逆語順観である。

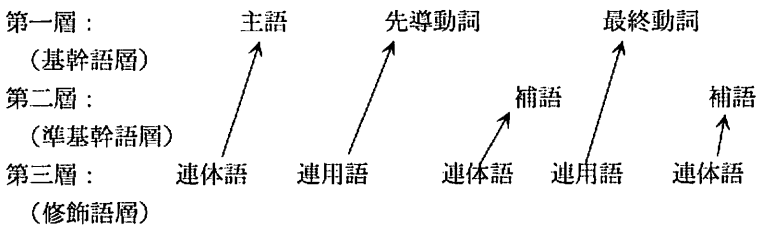
今の補語観に即して解釈するならば，話し手の関心は文の展開につれて補語に移り，文における話し手の「居所」と「現在」はまさにその補語に寓するようになる。そこを基点にして見れば，前にあった表述はまさに一経過点であり，「過去」である。

その基点となる動詞（形容詞の可能性もある）を，わたしは最終動詞（last verb）または最終述語（last predicate）と呼び，その前に出た動詞（形容詞の可能性も若干ある）を先導動詞（preceding verb）または先導述語（preceding predicate）と呼びたい[3]。

これからもう少し具体的な文例に即して私見を述べたい。下文において，わたしは基本的に先導動詞と最終動詞という用語を使い，先導述語と最終述語を使わない。その理由は三つある：①実際，その位置にあるのは，形容詞に比べて動詞が断然多く，とくに先導の場合。②述語という用語を広義的にとらえるとそれにつく名詞を含む理解もある。③中国語の場合では，形容詞を動詞の一種だという見方がある。

そして，以下の論述の中では，わたしは，動詞の後につく名詞などの体詞をすべて補語と称する。その補語は今，一般に言われている「賓語」（即「目的語」）及び「数量補語」を含む。その詳細については，拙稿「新補語論」（『法政大学教養部紀要』第 100 号 1997 年 2 月）をご参照していただければありがたい。

以上の観点から，文構造は次のような三層によって形成されると理解することができよう。



Hosei University Repository

第三層は修飾語で，文構造の完全原則つまり文の成立ができるかどうかには影響しないのである。

同じく文構造的完全原則により，第二層の補語はその前の動詞にとって非必補補語である場合もあれば，必補補語である場合もある。例えば，「他吃饭了。」の文中の「饭」をとって，「他吃了。」という文も成立する。しかし，「我是日本人。」の文中の「日本人」をとったら，「我是。」という文は普通は成り立たない。

また，内容的完成度からみると，非必補補語が文表現の重点となって，または意味の正確さを伝える上で欠かせない場合もある。例えば，

她来了三次。／彼女は三回来た。

の文から「三次」をとったら，

她来了。／彼女は来た。

という文になる。文は成立するが表現はだいぶ違う。

よって，以下の論述は，第一，二層を含めた文の形式から，四つのパターンに分けて行われることにした。

一．先導動詞に補語がつくパターン
二．先導動詞に補語はつかず，「着」「了」「得」などがつくパターン
三．両動詞がくっつくパターン
四．「来」「去」が文尾に出るパターン

一．　先導動詞に補語がつくパターン

1．　いわゆる「前置詞」を用いた場合

小朋友们在公园玩儿。／子供達は公園で遊ぶ。

の中の「在」を，わたしは先導動詞と呼ぶ。

中国語の前置詞はほとんど例外なく，動詞から来たものでいわゆる虚化された動詞である。そういう意味で，前置詞という用語の存在自体が，すでに前か

Hosei University Repository

らの語順観が崩れていることを意味している。つまり，その前置きとは，いわゆる前置詞がその目的語の前に置かれるというよりも，いわゆる主要動詞の前に置かれるという意味がより重要だと思う。

趙元任氏は，それを「coverb」とも称し，その特性を認めながらも動詞の大枠の中でとらえている[4]。

無論，前置詞は詞によって動詞としての機能の虚化または変化，意味の喪失または変質の度合いがまちまちである。例えば

学生们在教室里学习。／学生達は教室の中で勉強する。
学生達は教室の中にいて勉強する。
（学生们在教室里。／学生達は教室の中にいる。）

の「在」と，

我把衣服洗了。／私は服を洗った。
（我把衣服。　不成立）
（我把衣服洗。　不成立）

の「把」とはかなり違う。

2.　使役動詞

老师让学生背书。／教師は学生にテキスト文を暗唱させる。

の中の「让」を動詞として見るが，

馒头让弟弟吃了。／饅頭は弟に食べられた[5]。

の中の「让」を前置詞として見るのは果たして必要であろうか。また，そのような分析は結局，文の意味を知った上でのわざである。だが，文意を解すれば品詞分類はもう意味が薄れる。

よって，むしろ両方とも動詞で，今はとちらも先導動詞として務めていると見たほうがよいと思う。

Hosei University Repository

3.　いわゆる兼語文の「有」

教室里有五十个学生在学习。／教室の中で五十人の学生が勉強している。

ここの「有」は先導動詞で意味が相当薄れたように思われる。

教室里有五十个学生。／教室の中には五十人の学生がいる。

の「有」と対比すれば，一目瞭然である。
しかし，次の場合では「有」が先導動詞であっても虚化度は低い。

她有事找你。／彼女は用があってあなたを探している。

4.　いわゆる連動文の二つのパターン

①姐姐去食堂吃饭。／姉は食堂に行ってご飯を食べる。
　　姉は食堂にご飯を食べに行く。
②妹妹用毛笔写字。／妹は筆を使って字を書く。

の中の「去」も「用」も先導動詞である。意味関係からいえば，①の最終動詞「吃」は「去」の目的であり，②の「用（毛笔）」は最終動詞「写」が行われる方式である。
実は，ここの「用」を連動文の方式を表す動詞として見るかそれとも前置詞として見るかもかねて議論になっているが，先導動詞を使えば問題は解消する。

二.　先導動詞に補語はつかず，「着」「了」「得」などがつくパターン

1.「着」を使う場合

弟弟常常躺着看书。／弟はよく寝ていて本を読む。
他们走着回家。／彼らは歩いて家に帰る。
妈妈笑着说。／お母さんは笑って言う。

Hosei University Repository

「着」は持続状態を表す動態助詞である。ここでは，〈先導動詞＋着〉が上述した「妹妹用毛笔写字。」（一の4の②）の「用(毛笔)」と同様に，最終動詞の表す動作の方式などを表している。

2. 「了」を使う場合

大家吃了再玩吧。／みんな食べてから遊ぼう。
她来了就出发。／彼女はついたらすぐ出発する。
天亮了就起来。／夜があけたらすぐ起きる。

ここの「了」は動態助詞の「了」で動作の完了または現象の達成を表す。ここでは「吃」「来」「亮」の完了か達成を表すものだけで，「玩」「出发」「起来」の完了を意味するものではない。実際，「玩」「出发」「起来」はまだ行われておらず，「吃」や「来」の完了，「亮」の達成をその前提条件としている。「吃」や「来」も結局，未完了であり，「亮」も未達成である。
たが，

她来了就出发了。／彼女はついたらすぐ出発した。

なら，「来」が同じ前提条件となっていてもすでに完了した。要するに，最終動詞の「出发」が基点になる所以である。

3. いわゆる構造助詞「得」が介在する場合

他跑得很快。／彼は走るのが早い。

の中の「快」を最終述語と見なし，「跑」をその「快」の先導動詞としてとらえる。

他说日语说得很好。／彼は日本語を話すのが上手である。
他日语说得很好。〈意味は同上〉
她做菜做得很好。／彼女は料理を作るのが上手である。
她菜做得很好。〈意味は同上〉
菜做得很好。／料理はうまく作られている（できている）。

Hosei University Repository

の場合も同じ，「说」と「做」を「好」の先導動詞としてとらえる。

爷爷走得累了。／お爺さんは歩いて（結果が）疲れた。

の中の「累」は「走」の結果であるといってもいいし，逆に「走」は「累」の原因といってもよかろう。構造からは「走」を先導動詞と称したい。

她说得大家都笑了。／彼女は話して（結果が）みんなが笑った。
彼女の話でみんなが笑った。

の場合も「说」を先導動詞としてとらえる。

看得懂。／見て理解することができる。

の場合の「得」は確かに以上の例文中の「得」とは同じではないが，しかしそれを挟む両動詞の関係は同じであろう。つまり「看」は先導動詞であって「懂」は最終動詞である。

「看不懂。」の場合も同じようにとらえられよう。

三．　両動詞がくっつくパターン

1．先導動詞が補語をとらなくてもよい場合

馒头被吃了。／饅頭は食べられた。（一の１と２を参照）
姐姐去吃饭。／姉はご飯を食べに行く。（一の４の①を参照 ）

の場合も「去」や「被」を先導動詞として認識する。ただその間に補語がなく両動詞の一体感が強い。最終動詞が補語をとるならば，両動詞が一緒になってとっているかっこうになる。

2．いわゆる助動詞を使う場合

人要喝水。／人間は水を飲まねばならない。
爸爸想去中国。／お父さんは中国に行きたい。

Hosei University Repository

「想」を基点とする人はよく次のような問答例をとりあげる。

爸爸想不想去中国？
想。

よって，「去（中国)」という動詞句を「想」の目的語だと説明し，さらにここの「想」を動詞句目的語をとる動詞だと規定する。

しかしながら，ここの応答文の「想」はあくまでも「想去（中国)」の略である。同様に，質問文の「想不想去（中国)」は「想去（中国）还是不想去(中国)」の略式であろう。「想」だけを出発点としたら「想吃」やら「想来」やら幾らでも連想できる。

さらに「想家」のような，「想」を心理動詞（その辺の分類もまた単純ではないが）としての表現も考えられる。

「想」「要」のような動詞はいわゆる助動詞として務めるとは限らない。そういう意味で，助動詞を一品詞としてでなく，動詞の一用法としてとらえたほうがよいかも知れない。結局，それも一種の先導動詞なのだ。

「应该」のような，いわゆる助動詞としてしか務めないものは極めて少ない。それでも使う時にはその後にくっつく動詞と一緒に考える必要がある点では「想」と変わらない。

先導動詞とその後の動詞の間に補語が入らない（入れない）分，両者の関係がぐっと緊密になろう。

3. いわゆる〈動詞＋結果補語〉の構造

両動詞が表述する対象（主語）は同じであればわかりやすい。

我听懂了。／私は聞いてわかった。

「わかった」という状態は「現在」におかれる状態である。「聞く」という行為にとって「わかった」は結果をいうものだが，「わかった」という「現在」から見れば「聞く」は行き過ぎた「過去」にあった行為にすぎない。

が，そうでない場合では，例えば，

Hosei University Repository

他　打死了　一个人。／彼は一人の人間を殴り殺した。
主　述-補　　賓
　　述　　主

というような分析法，つまり表層構造分析と深層構造分析の合わせ技で対処している。そこで，表層構造上で補語にあたる「死」は，深層構造上では，表層構造上で目的語にあたる「人」を主語としていることが示されている。

しかし，深層構造は畢竟，文法構造ではなく，文意構造というものなのだ。

もしも，先導動詞・最終動詞の観を用いれば，「打死」も「听懂」も同じ構造であって，後者の「死」や「懂」が基点となる。そして先導動詞が補語をとれない分，両動詞の一体感が強い。最終動詞につく補語は両動詞につく形に見える。そういうわけで，文法構造上では，

他　打死了　一个人。
主　先-終　　補

としてとらえたい。

無論，先導・最終両動詞の結合度は詞によって違う。例えば，「看见」「听见」のような言葉ならほとんど一単語として認めてもよかろう。

一般に

爸爸在沙发上坐着。／お父さんはソファーの上に座っている。

の中の「在」を前置詞としてとらえるが，

爸爸坐在（了）沙发上。／お父さんはソファーの上に座った。

の中の「在」を結果補語・動詞として，或いは「在沙发上」を前置詞構造の補語としてとらえる。後者の長所は「在」を一貫して前置詞としてとらえるところにあるが，しかしここの「在」の後ろになぜ「了」が用いられるかをうまく説明できない。

拙説を用いれば，説明がつく。「在」が先出すれば「坐」の先導役を務め，

Hosei University Repository

「坐」は基点となる。語順が換わればその役目も換わり，「在」が基点となり，そして当然，動詞としての本来の機能を全うすることができる。「坐」と「在」がくっついているから「沙发上」を「坐在」の補語として見受けられよう[6]。

我借他两块钱。／私は彼に二元のお金を貸した。
私は彼に二元のお金を借りた。

の場合，「借」は授与・受領の兼類動詞であるがゆえ，以上の二つの相反する意味がとれる。

我借给他两块钱。／私は彼に二元のお金を貸した。

なら「与える」の意を表す授与動詞「给」が最終動詞になるので岐義はなくなる。

4. 「是」が先導動詞になる

他昨天来的。／彼は昨日来たんだ。
他是昨天来的。〈意味は同上〉

他来了。／彼は来た・来ている。
他是来了。／彼は来たんだ・来ているんだ。
彼は確かに来た・来ている。

他明天来。／彼は明日来る。
他是明天来。／彼は明日は来るんだ。
彼は確かに明日は来る。

天黑了。／暗くなった。
天是黑了。／確かに暗くなった。

这个电影有意思。／この映画は面白い。
这个电影是有意思。／この映画は確かに面白い。

Hosei University Repository

各組の後者がその用例である。

四. 「来」「去」が文尾に出るパターン

最終動詞を確定しかねない時もある。それはつまり「来」や「去」が他の動詞の後について文尾に出る時である。文型でいえば，いわゆる「来」か「去」のある趨向補語を用いた文，または〈ＶＰ＋来／去〉式の連動文に関わる。

陸倹明氏は，〈ＶＰ＋去〉の文型を，文意構造関係によって六つのパターンに分けている(7)。

その六つのパターンを，「去 qù/tɕʻy⁴/」という実音で発するかそれとも音便により「去/tɕʻi⁰/」という音で軽く発するかという基準で，さらに二分することができる。

前者は次の三パターンを含む，

① 我坐火车去。／私は汽車で行く。(一の４の②を参照)
我们走着去吧。／私たちは歩いて行こう。(二の１を参照)
一定得带着枪去。／銃をもって行かなければならない。(同上)

② 我吃了饭去。／私はご飯を食べてから行く。(二の２を参照)

③ 我让他去。／私は彼を行かせる。(一の２を参照)

すべて上文に既に出ているパターンである。ここの「去」はみな最終動詞として認識することができる。

一方，音便により軽く発音された「去」を用いた後者も三パターンある，

① 先打我这儿拿点儿去。／先ず私の所から少しもって行け。
茶叶我已经给他寄了一斤去了。／お茶は私はもう彼に一斤送ってやった。

② 他回研究所去了。／彼は研究所に戻った。
又把垃圾扔到江里去了。／またゴミを川に捨てた。

Hosei University Repository

③　我们吃饭去！／私たちは食べに行こう。

実は，ここの①について陸氏本人も認めているように，人によって，例えば，劉月華氏らはそれを趨向補語の範疇の中でとらえているという[8]。

②の文型も①と同様にとらえることができる。

③だけが普通，連動文として取り扱われている。

ここで，わたしは次のように文型を整理してみた。

1.「进」などの客観趨向動詞を使い，「来」か「去」を使わない場合

老师走进教室了。／教師は歩いて教室に入った。
他拿出一本书。／彼は本を一冊取り出す。

もしも従来の補語観を用いたら，「进」や「出」はいわゆる趨向補語で結果補語にかなり近い。

わたしは，前の動詞が移動動詞であろうと，他動詞であろうと，みな先導動詞としてとらえ，「进」や「出」を最終動詞としてとらえる。

2.「来」か「去」を使う場合

他朝前走去。／彼は前へ歩いていく。

妈妈寄钱来了。／母はお金を送ってきた。
妈妈寄来（了）十块钱。／母は十元のお金を送ってきた。

老师走进教室来了。／教師は歩いて教室に入ってきた。
老师走进来了。／教師は歩いて入ってきた。

他拿出一本书来。／彼は本を一冊取り出してくる。
他拿出来一本书。〈意味は同上〉。
他拿一本书出来。／彼は本を一冊取り出してくる。
　　彼は本を一冊もって出てくる。

以上の文中の「来」「去」を最終動詞に決めるには躊躇せずにいられない。

Hosei University Repository

ここの「来」「去」はいずれも場所補語をとる機能を失っており，たとえ場所補語が存在していてもその後方に位置することに甘んじるかのようにさえ見える。補語をとれるのは前に「寄」や「拿」のような他動詞が前方にあっている時のみ，しかも共同の形で補語をとっている。

以上の種々の原因で，ここの「来」「去」を，繆錦安氏は，独立とした，話し手を基準にした趨向を表す趨向助詞と呼ぶように提言している[9]。

わたしも同意である。つまり，以上の例文を次のように分析すべく，

老师　走进　教室　来 了。
主　先-終　補　助 助

他　拿出一本书来。
主 先-終　補 助

他　拿出来　一本书。
主 先-終-助　補

他　拿　一本书　出来。
主　先　補　終-助

となる。

3. いわゆる趨向補語は熟語として使われる場合

你应该坚持搞下去。／あなたは続けてやっていくべきである。
天气冷起来了。／(天気が) 寒くなってきた。
大家都唱起歌来了。／みんなが一緒に歌を歌い出した。

ここの「起来」や「下去」は構造上からは非常に説明しにくい。一語のようだが割れて使われる時もある。幸い，その数はそれほど多くならず，それぞれの意味や機能もある程度決まっている。一部の先達の意見を参考に，最終動詞でなく，一種の二字助詞として見たほうが妥当であろう。

Hosei University Repository

4. 「我们吃饭去」の場合

「吃饭去」は「去吃饭」(三の1と一の4の①を参照) とは文意上では似ている (「ご飯を食べにいく」)。即ち両動詞の意味関係が同じ，同じく「吃」は「去」の目的となっているのだ。しかし異もある。「去吃饭」を「去食堂吃饭」にふくらませることはできるが，「吃饭去」の「去」は場所補語をとる機能をもっておらず，「吃饭去食堂」にすることはできない。

趙元任氏はここの「去」または「来」を「pariole of purpose」と名付け，呂叔湘氏はそれを「表示目的的助词」(目的を表す助詞) に訳している[10]。

こういう時の「来」「去」も最終動詞として認められないのである。

今日，中国語の文構造の分析法が多様多重化され，統語論 (syntax) に，文意との関連に着眼する意味論 (semantics)，使用者や使用環境を視野におさめる語用論 (pragmatics) なども加わってとても豊富多彩になっている。より正確に客体を把握する為に方法が複雑になっていくにも仕方がないかも知れない。ことに形態変化のない中国語には形式だけによる分析法がもはや限界にきているようだ。

しかしその限界に挑んでみるのは本稿の旨である。

文を複線的に見るのもよいが，文の本来もつ線形を忘れてはいけない。主題先出は一つの法則であるならば，最終動詞を基点とするのも法則の一つに数えられよう。そして補語よりは先導動詞の観がはるかに分かりやすいと思う。

わたしの意とするところの先導動詞または最終動詞は，あくまでも中国語の文構造を分析する時の一用語である。前置詞が好きならば使ってもいいし，助動詞を用いてもけっこうである。また今のように補語を用いてもいっこう構わない。肝心なのはその用語を発する視座であり基点である。文の基点を最終動詞に定め，それを基点にしてから始めて先導動詞も見えてくる。斯くして中国語の文が構築されることをわたしは表したい。

《注》

(1) 他の意見もある。例えば，「爸爸坐在沙发上。」については，「在」を結果補語とせず，「在沙发上」を介詞 (即前置詞) 構造補語として見なす。
また，「我是中国人。」の中の「中国人」を賓語 (即目的語) でなく補語としてとらえる研究者も少なくない。

Hosei University Repository

そのほか，「听不懂」の「不懂」を可能補語とせず，動詞の可能語気（potential mood）とする意見もある。繆錦安氏編著《汉语的语义结构和补语形式》（上海外语教育出版社 1990年）38p. を参照。

（2）「必须」を助動詞と副詞の兼類詞とし，または「不要」「不用」を副詞としての品詞分類法も，助動詞は副詞的な性格を有することを示唆しているように思われる。

（3）「加以」「给予」のような動詞を「先導動詞」で呼ぶ人もいるが，その用法はわたしのとは異なる。範曉氏ら著《汉语动词概述》（上海教育出版社 1987年）125p. を参照。

（4） Yuen Ren Chao『A Grammar of Spoken Chiness』(University of California Press Berkeley and Los Angeles 1968) 335p.。

その中国語版は呂叔湘氏による《汉语口语语法》（商务印书馆 1979年）である。「coverd」は「副動詞」と訳されている（170p.)。同じ意味をもつと思われる「副動詞」は呂氏と朱德熙氏の共著《语法修辞讲话》（中国青年出版社 1952年）9p. にも見られる。今は「副動詞」という用語はあまり使わない。

ほかに，「是」のような動詞は「同動詞」と称されることがあり，その英訳も「coverd」である。そして，「把」を「同動詞」と称する人もいる（李英哲氏ら編著《实用汉语参考语法》96p. 北京語言学院出版社 1990年)。

（5） 実は「馒头让弟弟吃（了)。」は「饅頭は弟に食べさせる・させた」という意味もある。

（6）「她在看书。」の中の「在」を普通は副詞と見なすが，先導動詞としてとらえることも可能である。

（7）〈关于“去＋VP”和“VP＋去”句式〉（《语言教学与研究》1985年第4期）から関係論述を次に略記す。

“VP＋去”的内部语义结构关系要复杂一些，起码可以分下列六种情况：

(A) “去”表示V的受动者位移的运动趋向，那受动者成分有时在V后出现。……有时在V前出现。……在口语里通常轻读为［tɕʻi°］。

(B) VP和“去”说明同一个施动者，“去”表示施动者位移的运动趋向，VP则表示“去”的方式。……仍念本音［tɕʻy⁴］。

(C) VP表示事物位移的终点，可以是指V的施动者的位移终点，……也可以是指V的受动者的位移终点……在口语里也轻读为［tɕʻi°］。

(D) “去”表示施动者位移的运动趋向，VP指明施动者位移的时间，强调施动者的位移在另一行为动作完成之后。……仍读本音［tɕʻy⁴］。

(E) VP为述宾结构，其宾语成分是V的受动者，是“去”的施动者，这种“VP＋去”就是通常所谓的递系结构。……也念本音［tɕʻy⁴］。

(F) VP和“去”都说明同一个施动者，“去”表示施动者位移的运动趋向，VP表示施动者位移后进行的行为动作。VP和“去”之间有目的关系，即VP表示“去”的目的。……在口语里轻读为［tɕʻi°］。

ただ，本稿では陸氏の例文をそのまま使っていない。それは文法構造の解明を最優先課題にする為，例文のスマートをはかった結果である。かつて呂叔湘氏はこう言った，「一方面要广泛地调查实际用例，一方面也要不断地把问题拿出来理一理」（《汉语语法分析问题》7p. 商务印书馆 1979年）と。本稿は後者の「問題

Hosei University Repository

を整理する」類に属されると思われる。

（8）上の注に示された論文の附注を参照。言及された劉氏らの論は《实用现代汉语语法》（外语教学与研究出版社 1983年）である。

（9） 原文は「如果换一种想法，不把“拿出……来”的“来”看作表现趋向的补语，而看作独立的表现相对于言谈者的趋向的助词，就可以使述语，补语，宾语，趋向助词有固定的位置。」となる。注（1）に示された氏の著書の 35p. による。

（10） 注（6）に示された氏の著書 479p.。

それに併せて拙稿「類似文型の比較研究――“吃饭去”と“进门去”“让学生背课文”と“把书放在桌子上”――」（『法政大学教養部紀要』第95号 1996 年 2 月）を読んで頂ければ幸いである。